

山脇学園中学校

2025年度 入学試験問題

国語 C

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は50分間です。
3. 問題は□～四までです。
4. 解答はすべて解答用紙に書きなさい。解答らんの外に書かれたものは採点の対象としません。
5. 解答用紙に受験番号、氏名を書きなさい。
6. 字数指定のある問いは、句読点・記号も一字として数えます。

① 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ここで、森を出るといふ霊長類としては特別な生き方を始めた人類の誕生を見ていきます。① アフリカの森で暮らすチンパンジーとの共通祖先から人類（生物学ではヒトと呼ぶ）へと進化する物語は、今から700万年ほど前に始まったとされます。ゲノム（細胞にある全^{注1} DNA）解析で、チンパンジーが一番ヒトに近く、700万年ほど前に分かれ、ゴリラは900万年ほど前に分岐したということがわかりました。

チンパンジーとヒトのゲノムの差はわずか1・2%であり、しかもこれぞヒトをヒトたらしめているという遺伝子が見出されてはいません。全体としては明らかに違うのに、部分の違いでは説明できないのです。生きものは、それぞれ特徴がありながら、地続きなものの、全体で捉えるものなのだとなります。

A、化石から知られる特徴には、二足歩行とそれに伴う身体の変化と小さな犬歯があります。なぜ私たちの祖先は直立二足歩行を始めたのか。これはさまざまな状況証拠から考える他ありませんので、いくつかの説があり、これぞという決定版があるわけではありません。その中で、比較的多くの専門家が認めており、わたしも好きな説があります。

チンパンジーも含めて動物の多くは犬歯が発達しており、時には牙にもなっています。これは戦いに役立ちます。つまり犬歯が小さいということは、けんかが強くないということです。他の動物との争いは避けたでしょうし、仲間内でも力での戦いはあまりなかったでしょう。弱い人間は、家族やそれが集まった集団をつくって暮らしていました。

そんな祖先が暮らしていたアフリカの森は、果物などの食べものが豊富な場所でした。B 1000万年前頃からアフリカが少しずつ乾燥した気候になり始めたらしいのです。森林だったところが森林と草原の混じる

場に変わっていきました。植生も変化し、食べものが以前よりも少なくなったので、広範囲を探し歩かなければなりません。犬歯が小さく弱いヒトの仲間は、食べものの豊かな場所から追い出されたでしょう。森の端や草原に出て行くことになり、食べものを遠くまで探しに行かなければならなかったのです。

そこで、果物などを採ったオスが立ち上がってそれを手にのせ、離れたところにいる子どもを抱えたメスのところまで運んだのが二足歩行のきっかけだということです。その様子を思い浮かべると愛おしくなり、家族を大事にする気持ちに思い入れをしています。犬歯が小さくちよつと弱虫だったからということも含めて好きな説です。

弱いというイメージが浮かびますが、今でも強い引強い強者より弱い人の方が、なんとかしようとかあれこれ工夫をして新しい可能性を生み出すところがあります。弱いのは悪くありません。けんかもあまりなかったでしょう。この頃の脳の大きさは他の類人猿と変わりませんが、私たちの祖先はよい特徴を手に入れました。家族、時にはもう少し広い意味での仲間のいる、人間らしい暮らしの始まりです。（中略）

日常を共に暮らす仲間である家族の原点に「注2 共食」と「育児」があります。人間特有の二足歩行は、家族のための食べものを運ぼうとして立ち上がったところから始まったという説が好きだと書きました。ヒト以外の霊長類の仲間はすべて森林で樹上生活をし、草食性です。オランウータンとゴリラは完全な草食性ですし、チンパンジーもほとんど草食と言えます。私たちの祖先も、森林の中で果物や時に木の葉や樹皮などを食べて生きていたに違いありません。最も近縁のチンパンジーがそうであるように、昆虫やトカゲなどの小さな爬虫類も食べていたでしょうけれど。

森をはずれて暮らす生活が始まった時には、森の中にいた時よりは果物

が充分でないこともあり肉を探し始めます。②二足歩行を始めた猿人の段階で石器を用いるようになった私たちの祖先は、まず、草原に野生動物が残っていた獣骨に少しくつついている肉をはがして食べたようです。そこで植物やこれまで食べていた昆虫などとは違う肉の旨味を感じたのではないのでしょうか。

250万年ほど前にホモ属になると、③さらに肉を食べるようになっていきました。ここでも、大型の動物を対象にした狩猟以前に、野生動物が残した屍肉を食べていたようです。とくに骨を割ると出てくる骨髓を食したことで栄養価の高い食事となり、エネルギーを大量に必要とする脳が大きくなりました。脳の拡大が道具の工夫を生み、本格的狩猟へとつながっていく歴史が見えてきます。とくに大きな獲物が取れた時は、家族みんながウキウキして賑やかな食事になったに違いありません。

いよいよ私たちの直接の祖先であるホモ・サピエンスの誕生です。狩猟では、家族より大きな集団で動かなければ大型動物には向かっていけません。皆で追いかけて、石を投げたり、わなを工夫したりという協力が必要です。こうして得た食べものは仲間の皆で分けますから、ここでも共食がなされたでしょう。こうしてまず家族、さらにいくつかの家族の集まりという、人間ならではの仲間とのつながりが食を通して広がっていきました。

脳はたくさんエネルギーを必要とする臓器であり、これが大きくなることは、身体はどこかでの省エネを必要としました。植物よりも肉の方が消化しやすく、腸が短くて済み、実際に人類ではそれが起きています。調理ももちろん消化を助けました。こうして食べることの進化が、大きな脳という私たち人間を特徴づける進化を促したのです。

生活という文化と生きものとしての身体とは、深く関わり合っています。それは現在も起きているはずで、何を誰と一緒にどのようなにして食べるか

は、人間にとって大事なことです。一日のかなりの時間、スマホに向き合う生活の、脳への影響は、真剣に考える必要があるはずです。スマホを見ながら食事をしている若い人を見ることも少なくありませんので。

共食を支えているのは、食べものを分け合うという行爲です。サルの間では、強い個体が手にした食べものを独り占めします。チンパンジーやゴリラになると、美味しそうな食べものを強い個体が持っている時に、弱い個体が欲しそうな素振りを見せます。強いオスが肉や大きなフルーツを食べているところへメスや子どもがちようだい、ちようだいと求めに来る映像があり、そこではオスが渋々ではありますけれど分けてやっています。それを見て、人間もこれとあまり変わらないなと思いました。霊長類で生まれ始めた共食の土台を人間は強化していったのです。

④人間の共食には、他の種では見られない特徴があります。食べものを平等に分け合うのです。欲しいと言われて渡すのではなく、食べものを手に入れる時から家族、時にはもつと広い仲間と共に食べることを考えているのです。人間らしさに向けての大きな変化です。

人間は他の霊長類より弱かったもので、森のはずれに暮らすようになり、さらには森の外へまで出て行ったという説を、食べものの運搬と関連づけて紹介しました。そのような厳しい環境での生活が、皆で一緒に食べることによって仲間意識を強くした方が生き残れるという判断を生み出したのだらうと思われます。弱いことが、社会性の強い生き方を生み出したとも言えます。ここからコミュニケーションの大切さが生じ、言葉の誕生にまでつながるのだらうと思います。共食は、家族という基本単位と狩猟採集活動の仲間という二つの集団に上手に属していく複雑な人間の生き方を支えており、その意味はとても大きいのです。「私たち家族」だけに固執して排他的になるのではなく、「私たち地域仲間」の意識も持てるのが人間ら

しきです。家族という核を持ちながら仲間を広げることができるという人間の能力のすばらしさを自覚したいと思います。

(一部内容を省略しました)

【中村桂子『人類はどこで間違えたのか』】

注1 DNA：生物の形や性質を決める遺伝子をふくむもの。

注2 共食：誰かと一緒に食事をする事。

問一 ———— A・B に当てはまる言葉を、次のア～オからそれぞれ選びなさい。(同じ記号を使用しないこと)

ア すなわち イ 次に ウ ところが

エ 一方 オ あるいは

問二 ———— 線①「アフリカの進化する物語」とありますが、「チンパン

ジー」と「人類」について説明したものとして最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 人類とチンパンジーはゲノム解析でほとんど差がないので、分類上は同じ生きものであると考えられる。

イ 人類とチンパンジーは全く別の生きものであるが、その違いをゲノムの差から説明することはできない。

ウ 人類とチンパンジーのそれぞれ異なる特徴は、ゲノム解析によって共通の祖先より受け継いだものと分かる。

エ 人類とチンパンジーにおいてゲノムのわずかな差が、結果としてそれぞれの特徴を作り出している。

問三 ———— 線②「二足歩行を始めた」とありますが、その経緯を説明した次の文の I II III に当てはまる言葉を、本文中からそれぞれ

指定の字数でぬき出しなさい。

*ヒトの仲間は、I (六字) という特徴を持っていたために、他の動物との争いを避け、II (二十五字以内) ので、

III (十五字以内) とした結果、直立二足歩行を始めた。

問四 ———— 線③「さらに肉を食べるようになっていきました」とありますが、「肉を食べる」ことで人類へと進化する間にどのような身体的変化がありましたか。四十文字以内で答えなさい。

問五 ———— 線④「人間の共食には、他の種では見られない特徴があります」とありますが、どのような「特徴」が生じたのですか。その理由もふくめて六十文字以内で答えなさい。

問六 本文は次の一文がぬけています。この一文が入る直後の五字を本文中からぬき出しなさい。

*こうして、本格的な狩猟採集社会が始まります。

問七 本文の内容として適当なものを、次のア～オから二つ選びなさい。

ア 人間の祖先は森を出るといふ霊長類として特別な生き方を始めたことで、弱さを克服し他の生きものよりも強くなることができた。

イ 猿人は道具を使うことで動物を狩ることが可能となり、その結果、より栄養価の高い食べものを手に入れられるようになった。

ウ 他の霊長類でも食べものを分け合うという行為は見られるものの、それは人間の「共食」とは土台が全く異なるものである。

エ 人間は他の霊長類よりも弱かったため、社会性の強い生き方を生み出し、それが言葉の誕生にまでつながることとなった。

オ 人間は家族以外にも共に生きていく仲間を広げることができると、それら二つの集団に属する生き方を支えているのが共食である。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

バレーボール部に所属する明鹿高校二年生の「僕（宮下景）」は、怪我後の復帰試合で、以前のようなプレーができず、自分にとってのバレーボールとは何なのかを考えるようになる。十二月、複数校が参加する合宿での練習試合で、明鹿は春の予選で対戦した稲村東高校に再び敗れた。以下は、「僕」が、合宿所のトイレで偶然会った稲村東の有力選手である和泉隆一郎と会話している場面である。

「和泉くんは」

高校バレー界の注目選手といつの間にか落ち着いて会話できていることに気が大きくなったのかもしれない。それに、隣で歯ブラシを持つ和泉は少しだけ無防備に、普通の高校生らしく映っていた。

「バレーしてるとき、どんなことを考えてる？」

誰になにを訊いているんだと、すぐに後悔と恥ずかしさが押し寄せた。しかし引つ込みがつかなくて「無心、ではない？」と質問を足してしまう。

昨日も今日も、試合中の僕は考えすぎていた。でも、怪我する前は違った気がする。意識は無心というか注¹フラットな状態で、ほとんど自動的に身体は動いていたような。それが注²遊³の目には楽しくなさそうに、かつ和泉と似ているように見えるのなら、この質問は聞いておかなければならないと思った。

「試合中という意味でいいか？」

和泉は歯ブラシを持ったまま、じつと鏡を睨みつける。僕が頷くと、

「それなら、無心ではない。無心はありえない」

と、言い切った。

「もちろん、思い悩むこともしない。反省や後悔は雑念だ。修正だけすれ

ばいい。試合中に必要なのは、雑念を排除した上で思考し、行動を最適化することだ」

「最適化？」

「八秒だ」

和泉は鏡越しに僕を見据えた。意味を掴もうとしたけど、すぐにはわからない。

「……笛が鳴ってから八秒以内にサーブ打たないといけない、ってルールの？」

違うだろうな、と思いながら口にした。案の定、和泉は首を横に振る。

「俺が言ってるのは、① もう一つの『八秒』だ。聞いたことないか」

「うん、たぶん知らない」

「バレーボールにおいて、点が決まっ注³てラリーが途切れ、次のラリーが始まるまでの時間。それが、だいたい八秒くらいだと言われている」

初めて聞く話だった。ラリー間が何秒かなんて考えたこともなかった。

点数が決まってから、試合再開の笛が鳴るまで。得点に喜んだり、サーブプレシ⁴ブの陣形に移動したり、サーブを打つ選手にボールを渡し、ボールを受け取ったサーバーが床にボールをついたりする時間だ。言われてみれば、八秒くらいかもしれない。

「で、その八秒が？」

「その八秒間で、考えるんだ」

頭をフル回転させる、とも和泉は言った。「次のラリーで生じうる可能性について、この短時間ですべて洗い出して検討する。そのときのローテーション、ポジション、事前のデータとその日の相手の調子と傾向、自分の調子、味方の調子と傾向。それらをもとに八秒間で考える。パターンを整理して、次の行動を最適なものにする。ラリー中の判断速度が極限まで高

まるように」

和泉にとっては当たり前にやってきたことなんだろう。その淀みない自信に満ちた口ぶりから、そして試合中彼の坊主頭の中で無数の思考が渦巻いている様子を想像して、これが一流の選手か、と圧倒される。

でも同時に、僕にもできそうだと、とも思っていた。少なくとも、試すことはできそうだった。ラリーとラリーの間の八秒で、反省とか後悔とか余計なことを考えず、次のプレイの予測を立てる。そんなふうにはプレーする自分は割と簡単にイメージができて、無心になることより、ずっと簡単だと思えた。

「反省や後悔は、試合が終わってからだ」

和泉は言った。「存分にやればいい。悩んだり、苦しんだりとはコートの外でやることだ」

「いまの和泉くんでも悩んだりするんだ」

和泉の喉元からまた、くつくつと聞こえた。

「悩んでばかりだ。自分が下手くそだと思ふことも、今日はバレーしたくないなと思うことだってある。ときどきじゃない。頻繁にある。バレーを始めてからずっとそうだ。同じことの繰り返しだ。ただ、俺はそれでいいと思うことにしている」

和泉はゆつくりと続けた。

「悩みながら、もがきながら、それでも決してバレーを離さないやつが一番強い」

② ばかり、と頭の奥でなにかが弾けた感覚があった。正体はわからないけど、ポップコーンがフライパンの上で一斉に飛び跳ねるような、スイッチが切り替わって一瞬のうちに広い部屋の隅々まで照明が灯るような、そんな感覚だった。

「なんだか堅い話をしてしまったな」

和泉は手に持っていた歯ブラシをようやく、口に含んだ。

「明日、明鹿と試合できるのを楽しみにしている」

くぐもった声で言った。「遊晴も、今日俺が注4 試合後にかけて発破で奮起するだろうからな。あいつも俺と同じくらい負けず嫌いだ」

僕は少し笑って、そうだね、と返す。和泉の言う「明日の明鹿との試合」に、僕は出ているんだろうか、と一瞬そんな疑問が頭をよぎるが、すぐに払いのける。

「また明日」

僕が言うと、和泉は礼儀正しく目礼した。僕はトイレを出た。

暗く静かな廊下を歩きながら、記憶を辿る。

決してバレーを離さない。

③ 似たような言葉を最近聞いた気がする。いや聞いたというか、どこかで見たような。

細かい雨が窓を叩く。僕は足を止め、冷たい壁にもたれて考えた。窓の水滴は徐々に集まって大きくなって、滑り落ちる。

僕は携帯を取り出し、ラインを開いた。

注5 真島綾とのトーク画面を開いてから電話をかけるまで、実際にどれく

らいの時間がかかったのかはわからないし、知りたくもなかった。(中略)

「……もしもし」

唾を飲み込んでから僕は言う。幸い、声が裏返ることはなかった。

「もしもし」

④ 電話の向こうから聞こえてきた真島の声は、微かに笑っていた。(中略)
「宮下くんにお礼がしたくて。お礼っていうか、恩を返したい」

恩を返したい。どこかで聞いたことがある響きだった。

「……罪を滅ぼしたい、みたいだ」

あれはまだ十一月だった。注6 体育館の昇降口で告げられた言葉を思い出し、僕は少し笑ってしまう。本当だね、と真島も笑ったのが電話越しにわかった。

「それでお礼って？ 僕、なにかしたっけ」

「したよ」

真島は言った。「おかげで、また私描けそう」

あまりに普通の調子で言うから、すぐには理解が追いつかなかった。意味がわかると今度は、もっと劇的な、ドラマロールとかファンファーレとか、そういう演出でもつけて言うべきことじゃないか、と困惑した。

「……本当に？」

「うん。次の作品が描けそう。キャラクターも出来たし、ストーリーも固まった」

僕は適当な言葉を探す。

「アイデアって、やっぱり、突然生まれるものなんだ？」

「突然じゃないよ。キャラもストーリーも、何度か考えたことのあるアイデア。でも初めて、形になりそうな気がしてる。気がしてるだけじゃなくて、これは間違いなく形にできてると思うてる」（中略）

「また、注7 深海に潜っていいける」

冗談めかしたふうに、真島は言った。

陽光がぼんやりと届く海の底で、彼女は机に向かってる。首元で銀色の魚が身を翻し、足元で足の長い蟹が砂地を掘る。真島は夢中でペンを動かして、描き上げられた原稿が一枚、また一枚と、ふわふわ漂いながら浮かんでくる。端正な線で構成された絵。真島は一人、顔も上げずに

没頭している。

そんなイメージがふと浮かんで、携帯を握る右手に力がこもった。身体が内側から熱を放つ。

「この前、公園で喋ったとき、感想を伝えてくれたでしょ？」

真島は言った。「心に残ってる台詞があるって。終盤の、幽霊の台詞」

「うん」

「私の漫画の、絵以外の部分についての感想、あれが初めてだったから嬉しかった。でも、それだけじゃない。その部分をあとで自分で読み返してみても気がついた」

⑤ 心臓が激しく鳴り、注8 拍出される血の勢いで指の先まで震えているように錯覚する。手に汗が滲んで、携帯のケースが湿った。もしかして、と思っていた。

『この部屋もこの街も、私にとって切っても切り離せないもの。だから、私はどこへも行けない』

真島は滔々と読み上げた。それから、照れ笑いが聞こえてくる。

「……自分で自分の描いた台詞を音読するの、めっちゃくちゃ恥ずかしい」

僕はなにも返せなかった。偶然の一致に身体も脳も固まっていた。電話をかける直前、僕が思い出していたのも、ちょうどその台詞だった。和泉の発した「バレーを離さない」という言葉から、それを連想していた。

「あのとき、宮下くんは、『私はどこへも行けない』の方に注目してくれていた」

真島は続ける。「でも、読み返して目が離せなくなったのは、その前の部分」

『私にとって切っても切り離せないもの』

僕の呟きは、誰もいない階段にぴんと鋭く響いた。

「そう。その部分。私こんなこと書いてたんだ、って読み返して驚いたくらい、それくらい本当になにげない台詞だった。でも、それに私は救われた。救われたって言うの大袈裟だけど、なんだか腑に落ちる感じがした」

遠くの街から届く真島の声は静かで、でも弾んでいた。その声音は、炭酸の底から、ふらふら揺れながら上ってくる小さな泡を思わせる。

「……切っても切り離せない。私にとって漫画はまさにそう。好きとか嫌いとかじゃない。もちろん好きで始めたことだけど、いつの間にかそんな簡単に割り切れるものじゃなくなってる。たしかに、描いていても苦しいことばかりだよ。でも私にとって漫画を描くことは、ほとんど生活の一部だって、そう気づいたら、これからも描いていける気がした」

息継ぎするように黙ってから、

「自分の書いた台詞でそんなこと思うって、変だけど」

と、真島はまた笑った。

僕は黙って、携帯を握りしめる。真島にとっての漫画を、僕にとってのバレエボールに置き換えていた。

切っても切り離せない。好きとか嫌いとかじゃない。生活の一部。

注。テトリスで凸の形のブロックが空いた部分にちようどびったりはまるような感覚だった。列が揃って、溜まっていたブロックが消えていく。

⑥ ずっと靄に覆われていた部分が晴れていく。

もしもし、という真島の呼びかけで僕は我に返った。(中略)

「じゃあ、また学校で」

真島が電話の向こうから言った。

「うん、じゃあ」

「次会うのはたぶん、年が明けてからだ」

「ああそっか、本当だ」

「良いお年を」

「じゃあ、良いお年を」

「というかその前に」

真島は、くすりと笑った。「メリークリスマスだ」

その声は、すぐ隣で発せられたもののように聞こえた。

いつの間にか、電話は切れていて、僕は暗くなった携帯をだらりと投げ出した手に持っていた。⑦ 頭の中心の方がぼんやりと霞んでいる。そのくせ、心臓は必死に自らの存在を主張するように跳ねている。なにがそうさせているのかは、はっきりしなかった。とりあえず、とりあえずいまは、はっきりさせないままでもいいと思った。

凝り固まった脚を揉んでほぐしてから、立ち上がった。

どうして僕は、高校でもバレエを続けたのか。どうしてずっとバレエをしているのか。その答えはもうわかる。

でも、一つでいい。なにか一つ、具体的に言葉にできれば。

真つ黒な廊下の窓に僕の姿が反射していた。細かい雨滴で輪郭が滲んでいる。

そのなにかは、きっとコートの中でしか見つからないだろう。

(一部内容を省略しました)

【坪田侑也『八秒で跳べ』】

注1 フラットな状態：感情の変化があまりない状態。

注2 遊晴：中学時代は和泉とチームメイトだった、明鹿高校バレーボール部のエース選手。

注3 ラリー：連続してボールを打ち合うこと。

注4 試合後にかけた発破：明鹿が稲村東に敗れた後で和泉が遊晴に「がっかりさせないでほしい」と声をかけたことを指す。

注5 真島綾：「僕」の友人。昨年描いた漫画が新人賞を受賞したが、その後作品が描けなくなっていた。「僕」は合宿前に受賞作品を読み、その感想を真島に伝えた。

注6 体育館の昇降口で告げられた言葉：「僕」の怪我について責任を感じていた真島が言った「罪を滅ぼしたい」という言葉。

注7 深海に潜っていきける：真島が、自分が漫画をすらすら描けているときの感覚を表現した言葉。

注8 拍出：心臓から体内に血液が送り出されること。

注9 テトリス：ブロックを重ねて消すゲーム。

問1 ——— 線①「もう一つの『八秒』だ」とありますが、この「八秒」

で「和泉」が心にかけていることを三十五字以内で答えなさい。

問2 ——— 線②「ばかり、と頭の奥でなにかが弾けた感覚があった」と

ありますが、このときの「僕」についての説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 和泉から試合時の話を聞いて、一流の選手の試合に対する執着心^{しゅうしゅう}に圧倒され、これまでの自分のプレー^{かえり}を省みている。

イ 和泉の試合中の時間の使い方を知ったことで、試合中に自分がやるべきことをはっきりと自覚している。

ウ バレーとの向き合い方を語る和泉の言葉から、自分にとってのバレーとは何かの答えにつながりそうな手がかりを得ている。

エ 一流の選手でも悩みもがきながらプレーを続けていることを知って、悩んでいる自分自身を認められたように感じている。

問3 ——— 線③「似たような言葉」とは具体的にはどんな言葉ですか。

本文中から二十字以内でぬき出し、最初と最後の三字を答えなさい。

問4 ——— 線④「宮下くんにお礼がしたくて」とありますが、どのようなことに対する「お礼」ですか。それを説明した次の文のⅠ・Ⅱに当てはまる言葉を、本文中からそれぞれ指定の字数でぬき出しなさい。

Ⅱに当てはまる言葉を、本文中からそれぞれ指定の字数でぬき出しなさい。

* 「僕」が真島の作品について、Ⅰ（十字以内）を伝えたことをきつかけにⅡ（十一字）と思えるようになったこと。

問5 ——— 線⑤「心臓が激しく鳴り、拍出される血の勢いで指の先まで震えているように錯覚する」とありますが、このときの「僕」の心情を表す言葉として適当でないものを、次のア～エから選びなさい。

ア 期待
イ 焦り^{あせ}
ウ 緊張^{きん}
エ 驚き

問六 ——— 線⑥「ずっと靄に覆われていた部分が晴れていく」とありますが、これは「僕」についてどのようなことを表していますか。五十
字以内で説明しなさい。

問七 ——— 線⑦「頭の方がぼんやりと霞^{かす}んでいる」とありますが、
このときの「僕」についての説明として適^{あた}当でないものを、次のア～
エから選びなさい。

ア 真島とのやり取りの中で、感情の動きがあつたことによる心地よい
疲労を感じている。

イ 電話での会話を通して、真島との距離^{きょり}が以前より近づいたように感
じている。

ウ 長時間の電話の疲れで、客観的な判断力が鈍^{にぶ}っているが、悩みが薄^{うす}
まったように感じている。

エ 相手を知るだけでなく、自分についても大きな気づきがあつたこと
を感じている。

問八 本文についての説明として最も適当なものを、次のア～エから選
びなさい。

ア トイレでの会話を通して和泉のバレーボールへの情熱を知った「僕」
は和泉に対して親近感を覚えた。

イ 和泉は「僕」には礼儀正^ぎしかったが、ライバル視している遊晴には
闘争心をむき出しにしている。

ウ 電話の前後に描かれる雨や窓の情景は、和泉や真島との会話による
「僕」の心の動揺^{よう}を示している。

エ 電話で「僕」に自分の変化を伝える真島の声は、落ち着きながらも
いきいきとうれしそうに聞こえた。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「Fortnite」や「Minecraft」はオンライン上のaカソウ空間で他のプレイヤーと戦ったり、交流したり、物を作ったりして楽しむゲームです。そうした空間のことをメタバースと呼びますが、それに近い考え方は一九九二年発表のSF小説『スノウ・クラッシュ』に登場しています。メタバースの語源は「超越」を意味する「Meta」と「世界」を意味する「Universe」を組み合わせたもので、二〇二一年にフェイスブックが社名をメタ・プラットフォームズに変更したことをきっかけにメタバースという言葉は世界的に広まりました。

メタバースはゲーム分野以外でも広く活用されています。コロナ禍とある高校がメタバース上の学校で文化祭を行ったことは大きな話題となりました。このように、その自由度はとても高いものだといえます。

ですが①メタバースは、まだまだ私たちの生活に身近なものとはなっていません。それは新しい利用者が参加するにはXが高いことが一つの要因としてbあげられます。たとえば、メタバースに深く入りこむには専用の巨大aゴグルのような機器が必要です。しかし、用意する手間がかかる、重くて長い間つけていられないといった欠点があります。またメタバースを作る会社側にとっても初期費用が高く、独自のメタバースをから作ると数千万円もの莫大aなお金がかかることもあります。

ただ、科学の発展はYです。いずれ、メタバースを誰でも手軽に使う時代がくるでしょう。さらにメタバース上の「味」や「におい」を現実の感覚として体験できるcギジュツができれば、多様な体験の機会を得ることにつながります。現在はまだ発展途上ですが、②将来は国も年齢も性別も超えて、現実と同じような感覚でメタバースを使うことができるようになるかもしれません。

問一 線a～cのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 Xに当てはまる四字のカタカナを自分で考えて答えなさい。

問三 Yに当てはまる言葉として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 一進一退 イ 暗中模索 ウ 悪戦苦闘 エ 日進月歩

問四 線①「メタバースは～なっています」とありますが、その理由として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 利用者にとっては機器の準備が難しく、企業側にとってもサービスを始めるための初期費用が高くなりやすいから。

イ 利用者にとっては重たいゴーグルを長時間使うことは難しく、企業側もそうした機器を用意することは費用の面で大変だから。

ウ 企業側が初期費用を抑えているため、新しい利用者にそのメタバースの魅力が伝わっていないから。

エ 企業側が高性能のメタバースを作っても、自由度が高すぎるあまり利用者が使いこなせないから。

問五 本文の内容として適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア メタバースは、フェイスブックの社名変更をきっかけに、小説『スノウ・クラッシュ』の世界から名付けられた。

イ メタバースは、感染症流行で閉鎖的になった社会でも人々のつながりを生み出した。

ウ メタバースへの深い没入感を得るには、味とにおいの疑似体験が必要不可欠である。

エ 国も年齢も性別も関係なく、全くの別人になれることがメタバースの最大の魅力である。

問六 線②「将来は～できるようになる」とありますが、「メタバース」は私たちの生活のどのような場面で活用できると考えますか。本文で述べられている例以外の具体例を示した上で、その活用場面と利点についてあなたの考えを述べなさい。

四

次の各問いに答えなさい。

問一 次の1～5の――線のカタカナを漢字に直し、その熟語と構成が

同じものを、後のア～キから選びなさい。(同じ記号を使用しないこと)

1 一頭の犬にコオウして、他の犬も吠える。

2 急なフクツウに見舞われた。

3 シュウシヨク活動にはげむ。

4 裁判でイギをとなえる。

5 増水した川に近づくのはキケンだ。

ア	救助	イ	往復	ウ	黒板
エ	乗車	オ	市立	カ	未知

問二 次の1～5の(――)には、それぞれ同じ言葉が入ります。当ては

まる言葉をひらがなで答えなさい。ただし、□にはひらがなが一字入ります。

1 メダルを首に(□□□)。
馬が大地を(□□□)。
絵を壁に(□□□)。

2 怒りを(□□□□)。
要点を(□□□□)。
暴動を(□□□□)。

3 味を(□□□)。
その商品が市場の大半を(□□□□)。
着物の帯を(□□□□)。

4 真意を(□□□)。
計画の成功を(□□□□)。
再起を(□□□)。

5 予算を(□□□)。
円陣を(□□□)。
水を(□□□)。